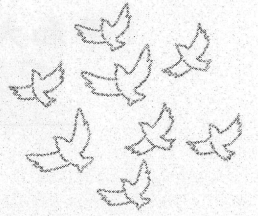


「平和大使として学んだこと」

## 被爆者の思い

おたかの森 小学校 六年 氏名中村 稟



「平和大使」を終えた今、私は世界に必要だと考えることは、世界のト々に戦争や原爆の怖さなどについて深く知ってもらう事である。

広島に行くまでは、原爆は怖い爆弾だと思っていたが、実際に行って升ると原爆は、「怖い」ではなかった。言葉で表現できない程怖かった。

私は、被爆体験伝承者の細光規江さんのお話を聞いた時、こんな事が現実にあっているのか、そう感じた。細光さんのお話は、想像を絶する内容だった。それは一発の原爆によってほとんどの人が体中に大やけどを負い、水を求めながら亡くなった、というお話だった。最初は信じる事ができなかった。

爆心地の地面は三千度から四千度になった。私がその場にいたら生きる事をめきめきとしまうと思った。そんな中でも、生きたいと思っていた被爆者はすごいなと感じた。私は思った。「原爆は逃げられない・終わらない」

ものだ。

国同士の争いが戦争に発展してしまつと、友達にも会えないし、家族がなくなるかもしれない恐怖にたえることは私にはできないだろう。

被爆者の伝えた事、それは、日本だけでなく、世界中の人々にこんな思いをさせてはいけない」という事だと私は思った。

私の毎日は、とても恵まれている、と強く感じた。友達に会えることや家族と一緒に過ごす事は当たり前ではないのだ。

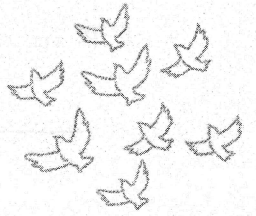
今後、自分にできる前は、もっと戦争や原爆について学び周りに伝えていくことだと考えた。私は、世界中の人々が笑顔で平和に過ごせる世界になればいいなと願う。



「平和大使として学んだこと」

平和は願うだけには言方なし)

八木北小学校 六年 氏名 大胡陽馬



私は思った。原爆は人の心、人の体、人の日常全てをこわしてしまふものなのだ。私は戦争や核兵器、平和について広島に行く前は、戦争は絶つたため、核兵器は広島も長崎に落とされた大きな爆たん、平和はみんなが願えば訪れる、そう考へていました。しかし、広島に行き、考へは大きく変わりました。戦争は罪なキ人が無様に殺されてしまふ勝者なキ争い、核兵器は人々の全てをうばい、こわしてしまう恐しい爆たん、平和は願うだけでは訪れず、行動してしかつ平和になる、そういう考へに変わりました。理由は、世界中平和で、戦争がなく、核兵器がない世界がどれほど尊いものなのか広島に行き、感じたからです。

「願うだけでは平和は、訪れません。」これは平和記念式典での平和へのちかい子供代表、石丸優斗キ人の言葉です。私はこの言葉が強く心に残りました。理由は自分の平和への考へを大きく覆えてくれたからです。実際

にも平和を願う人はたくさんいるけれども、世界平和はやはり難しいです。でも世界の全員が平和について考へ行動したら、必ず平和になると思います。なので、平和になるための行動も自分もしたいと思いました。

勉強になったことは、三つあります。一つ目は日本は戦争中、戦争一色にまみり、子供も働きだしたことです。被爆体験伝承者のお話をしてくださった細花親江さんは言っていました。一九四二年大平洋戦争中に国内にいるのは病人、けが人、高齢者、女性、子供で、労働力が落ちたそうです。なので、子供を働かせ、労働力を補う命令を出した事を聞いて、おどろきました。

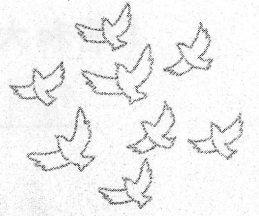
二つ目は、考へただけで広島を地獄のようにしてしまふほど、全てをこわす核兵器の恐しさです。平和記念資料館の絵画や写真も地獄のような様子を表す物がとても多かったです。核兵器の恐しさを知らぬが苦しくなりました。



「平和大使として学んだこと」

平和は原真うただけでは訪れない

八木北 小学校 六年 氏名 大胡陽馬



三つ目は、アメリカ軍が核兵器を落とそうとした日本の都市が四つあったことです。新潟、広島、小倉、長崎です。どの都市も工業や軍の施設が多かったのし、狙われました。原爆を落とそうとした都市が四つもあると聞いてとてもびっくりしました。

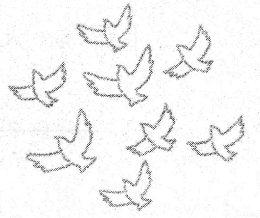
平和大戦を経験して田代たつとは、家族や友達に広島で学んだことを伝えるなど行動する。この大切さです。同じ六年生の石丸さん

せん。しの通り、願っただけでなく、しっかりと広島で勉強したことを友達や家族などに広めたいと思いました。そして、色々な人に平和について考えてもらう、そういう行動につながればよいと思っております。今回の平和大使は戦争、核兵器、平和とは何か深く考えることができたとても貴重な体験となりました。



# 「平和大使として学んだこと」

## 想像をぜっする「原爆」



流山 小学校 5 年 氏名 茂田 結人

ぼくがなぜこの活動にたづねをしたのかというところ、小さいころ図書館で読んだ戦争の本にきょう味を持ったからです。また、どうしたら戦争が無くなるかを知りに行きたいという気持ちで参加しました。

事前学習会の時、原爆の被害を学びました。まず「熱線」です。熱線により大やけどをおい、皮ふはたれ下がり、火事になるほどの熱さです。次に「爆風」です。家はふき飛び、人は飛ばされてしまいます。最後に「放射線」

です。何年、何十年たっても被害は続いてます。また、爆たんについても学びました。名前が「リトルボーイ」で、長さは約三メートルなのに重さは約四トンもありました。こんなに小さいのに、爆発した所の温度は、七千七百度にも達したそうです。

実際広島はけんに行つて、被爆体験者川岸さんから「ヒロシマを考えることは、かく戦争をきよひすることです」という言葉を教えるもらいドキッとして心にしみました。ぼく

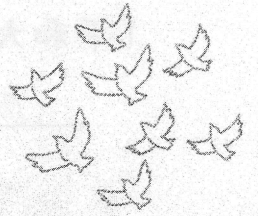
たちと同じくらい小学生や中学生は戦争には行かなかつたけれど、中学三年生は武器などを作るため基地に送られました。中学一、二年生は建物そかいという作業をしていました。空しゅうが来た時の火事をへらすため建物を一こおきに空地を作る作業です。小学生は畑の作業を手伝いましたが、畑で作った作物のほとんどが戦争に送られてしまい自分達は、ほとんど食べるものができないと聞ききました。ぼくだったらがんばっているのに食べ

られないなんてもうや、いけないと思います。

最後に、川岸さんが実際に体験した話を話してくださいました。川岸さんの家は爆心地から千五百メートルはなれていて、いつものように平和な朝でした。その時「ドン」というこまくがやぶれそうな音と熱線で家は火事になり、爆風で家ぐくずれ下じきになりました。がれきにはさまれ、声を出すことができませんでした。が、きせき的に頭だけ出すこ



# 「平和大使として学んだこと」



小学校 年 氏名

とができ、お母さんに助けをもらいました。  
安全な場所にひなんするための遠いなかの方  
まで歩きました。その時、黒い雨がふってき  
ました。ビニールシートがあつたのでかぶっ  
てやむのを待ちました。やっと安全な場所に  
着き、戦争中は食べられなかった白米のおに  
ぎりももらいました。生まれた時は戦争中だ  
ったため、白米を一度も食べたことがなか  
たのです。ぼくは、当たり前に白米が出てき  
て、ラーメンがおいしいと言っていた時であつた  
ため、かわいそうだと思いました。川岸さ  
んにとっては辛かったと思います。  
行く前は戦争にきょう味があるだけで、ほ  
とんどわかっていませんでしたが、戦争のお  
そろしさを知り、戦争、かく兵器の使用はぜ  
っ対にしてはいけないと心から思いました。  
戦争は小さな自分勝手な気持ちで何十万人も  
の命を失ってしまうぜっ対にやってはいけな  
いことです。小さなケンカもふくめ、他人の  
意見も受け入れたらいいですが、戦

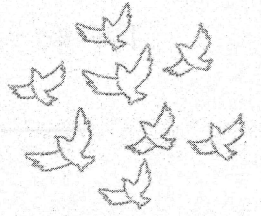
争が無くなる第一歩だと思いました。



# 「平和大使として学んだこと」

広島からぼくたちがうけつぐこと

おおたかの森 小学校 五年 氏名 亀田 碧



原爆が投下された広島、被爆した人々の姿を通してぼくたちが行動するべきこと、伝えていかなければならないことはなんだろうか。

ぼくはこの夏、平和大使として広島を訪れ、戦争と平和について考える貴重な経験をした。昭和二十年八月六日八時十五分広島に原爆が投下された。爆風、熱線、放射能がおそい街中が父の海となり、人々のさけび声、うめき声、泣き声や助けを求める声、街全体に響いた。声すらも失うことなく、息絶える者も大勢いた。

ぼくは広島へ行く前にお父さんから買ってもらった「ぼくは満員電車で原爆を浴びた」米澤鐵志の語り、由井りょう子さんの本を読んだ。本の中で

「あせと血がまじって、頭から顔から、赤く染まっていた」

これは原爆が落ちた直後の様子だ。あまりに悲惨な何が起こっているのか想像しがたかった。

が、おそろしいことが起こった。この話はよく分かった。

伝承者からは、この様子を被爆者の弘子さんが、広島を訪ねた地獄だと話されていた。伝承者のお話では、食べ物もなく、水すらも放射線を受け飲むこともできないから死んだ方がましと聞いたときは、あまりにも衝撃的だった。また、放射線の影響により、今でも苦しんでいる人いることを知り、被爆すると、髪が抜け、空腹なのに吐き気や下痢をし、数日から数週間のうちに死んでしまう恐ろしいことだと伝承者はお話して下さり、想像をはるかに越える恐ろしいことが79年前に起きた現実を知った。

広島で訪問したこと、体験したこと、経験したことを感じたことをたくさんの人やお友だちに聞いてもらいたい、伝えていきたいと思った。まずこの先二人が不幸なことが二度も起きないように、みんなにぜひ広島を訪れ平和資料館に足を運んでもらいたい。そして広島



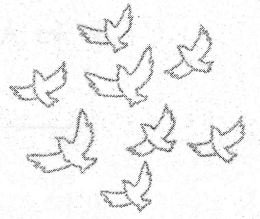




# 「平和大使として学んだこと」

原爆の恐ろしさを知って

南流山第二小学校 5年 氏名丸山 ゆい、

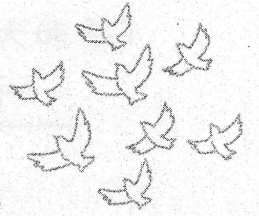


と九年前の昭和二十年八月六日広島の上空  
六百メートルから、原子ばくだんが  
「ドーン」  
と大きな音を立てて落とされた。真黒  
な放射線がふくんだ雨がふり続け、  
「水がほしいよ、痛いよ」  
と苦しみながら、何十万人の人が死んでいっ  
た。また、無事に生き残っても、今でも原ば  
く症で、苦しんでいる人がたくさんいる。ま  
た、大切な家族や友達が、とくなくなってしま  
い、  
ぎずを負ってしま、た人もたくさんいる。私  
は原ばくのことを知るために、広島に行きた  
。広島は、流山よりも、とても暑かった。そ  
九年前も、ぎつと暑かった。た。そんな中  
けんばくは、落とされた。印象に残っている  
ことは、まず平和記念資料館に行ったことだ  
。入ると暗く、絵や写真などが、たくさんあ  
た。その中でも、人かげの石や、鉄谷しん一  
人の三輪車。しん一ちゃん、当時から、大  
遊んでいる時に、いばくした。大げげや、大や

けどを見つけた。  
「水、水、水、」  
というその日の夜に亡くなった。見るだけ  
で、つらさが伝わってきた。見ていただけで  
こわかった。きょうふのあまり、目をとじて  
しま、泣きそうなのもあった。次に印象に  
残ったことは、平和記念式典で、小学六年生  
の、二人が言っていた、  
「願うだけでは、平和はおとすれません。  
色あざやかな日常を守り、平和をつくらね  
くのは、私たちです」  
と、言っていたことだ。私は、その言葉を聞い  
て、自分も友達や家族に、戦争のつらさを伝  
えたいと思った。戦争をするのは、かんたん  
だが、終わるのはむずかしい。戦争のない世  
界をつくり、けんやいじめのない世界にな  
ってほしい。そのために私は、家族や友達に戦  
争のつらさを伝えていきたいと思う。それ  
が平和大使の、役目だと思う。



「平和大使として学んだこと」



小山 小学校 5 年 氏名 水戸部 晃祐

平和大使として学んだこと

水戸部 晃祐

今回、平和大使として広島にはけんざれま  
した。ぼくは歴史にきょう味がおり直せつ店  
島に行つて原爆のひやんさや現地の人々の  
思いを学びたいと思ひました。

そして広島平和記念資料館へ行きました。  
そこには、まるで地ごく絵があらりました  
赤くただれたひやんさ水そうに一目さんにか  
けこむ人々死んだ赤んぼうをせきやうせき、

がれきの下じきになつてただ死を待つのみと  
なつてしまつた少年など、たくさんの人々が  
きょういふとつぽうを味わひきました。

どの絵やてんじ物もひやんでぼくの心にふ  
かくきざまれました。

戦争は起つてはいけなひことでもかくいひ  
はしつてもおそろしい物だも、ぼくは感じまし  
た。

でも世界では戦争やひやんさが今も起つてい  
ます。

なのでぼくたちは平和の大切さを学ぶ人々  
に広めるひつようがあると思ひます。

ひばく体験伝しつうこころ話で十番印象にの  
つたことも書きます。

ヒロシマを考へることはかく戦争をきよめ  
ることです。ヒロシマを考へることは平和に  
対しこの責任をとりつてです。